

方言音声における「～トイウN」の 日本語学習者による聴き取りについて

堀 口 純 子

1. はじめに

従来、日本語教育といえば当然のように共通語の教育と考えられていたが、首都圏以外の日本各地における日本語教育がさかんになるにつれて、学習者からも教師からも方言の必要性の認識が高まり、日本語教育において方言はもはや避けて通れない問題となっている。しかし、現状は、日本語教育の視点からの方言研究の不足が指摘され、その必要性が強調されるというような模索の段階にある。

日本語教育における方言教育の必要性を認めながらもカリキュラムの中に取り入れにくい原因の一つとして、外国人に方言音がどのように聞こえるかという研究がまだないことがあげられている⁽¹⁾。

そこで、1989年度に作成された全国音声データベースに収録されている方言語りの『桃太郎』を利用して、日本語学習者が方言音声をどれ程度聴き取れるかということと、どのように聴き取るかということを把握するために調査を行った。

本稿では、この調査の結果を資料として、「～トイウN」の聴き取りについて分析することにする。

2. 調査について

2.1 調査方法

文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」(代表 杉藤美代子)の成果の一つとして、19種のCDと3種のCD-ROMが作成された⁽²⁾。これは全国各地で同一の発声テキストに基づいて採録された大量の音声資料を、高品質で記録し必要に応じ

ていつでも引き出して利用することができるようにしたものである。

この中で1989年度に作成された『桃太郎・天気予報』のCDに収録されている「方言桃太郎」は、同じ話の北海道から沖縄までの方言による語りを、比較的短時間に聞き比べることができる。そこで、このCDを利用して日本語学習者の方言音声の聴き取り調査を行った。CDに収録されている「方言桃太郎」は、日本の代表的な昔話の一つである『桃太郎』の次の部分を方言で語ったものである。

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。
おじいさんは山へしばかりに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おばあさんが洗濯をしていると、川上から大きな桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。おばあさんはその桃を拾って家へ帰りました。

おばあさんが桃を切ろうとすると、桃がふたつにわれて、中から大きな男の子が生まれました。おじいさんとおばあさんはその子に桃太郎という名をつけました。

CDには全国19地点で方言で語られた「方言桃太郎」が収録されているが、調査で使用したのは16地点のもので、その地点名と話者の性別および年齢は表1に示す通りである。

調査は、1週間に1回表1の上から順番に1地点ずつ「方言桃太郎」を聞いて書き取る方法で行った。被調査者は筑波大学大学院地域研究研究科の学生で、中国9名、韓国4名、台湾2名、ブラジル1名の16名である。欠席者があった回もあり、得られたデータは1地点について13人～16人分である。被調査者の日本語力は上級で、専門書を読み、講義を聞き、ゼミで発表し、修士論文を書く能力を持っている。書き取りに際しての表記はできるだけカタカナを使うように指示したが、上級レベルの学習者であってもカタカナは使いにくいようで、ほとんど平仮名で書いている⁽³⁾。ただし、被調査者の平仮名表記も本稿ではカタカナで表記することにする。

2.2 調査結果のデータベース

調査結果はカード型データベースの形で保存されている。1枚のカードは次の6つの項目からなり、図1は1枚のカードの例である。

1：地名

2：学生イニシャル

表1 「方言桃太郎」の収録地点および話者情報

収 録 地 点	性別	年齢
北海道名寄市	男	62
青森県五所川原市	男	68
山形県東田川郡三川町	男	77
宮城県気仙沼市	男	66
富山県東砺波郡上平村	女	65
静岡市	男	75
静岡県浜松市	男	62
愛知県名古屋市	女	76
京都市	男	63
大阪市	男	78
奈良県生駒郡斑鳩町	男	70
岡山市	男	70
島根県松江市	男	73
山口市	女	72
福岡市	男	70
鹿児島市	男	73

3：母語

4：聴取日

5：聴き取り

6：誤聴部

「1：地名」は方言の調査地点名、「2：学生イニシャル」「3：母語」はそれぞれ書き取りをした被調査者のイニシャルと母語、「4：聴取日」は教室で書き取りを実施した年月日を示す。「5：聴き取り」は学習者がCDを聞いて書き取ったもので、上に述べた通りほとんど平仮名書きである。また、1文ごとに改行して入力してある。「6：誤聴部」は学習者の聴き取りが方言調査者による文字化⁽⁴⁾と異なる部分で、方言調査者による文字化の表記で示してある。例えば、図1の項目5に書かれている「ずっと」や「めやに」は、静岡市で録音調査にあたった方言調査者が文字化した「ズート」や「ミャーニ」とは異なっているため、項目6に「ズート」「ミャーニ」と入力されている。

1: 地 名	静岡市
2: 学生イニシャル	SA
3: 母 語	中国語
4: 聴 取 日	1991. 10. 21
5: 聴 き 取 り	<p>ずっとめやにあるところでじじがばばんで じじはやめへやめいおとれ、ばばはかりやへありや ものへいった。 ばばがあらつてると、かわのうえのほうからいけや んももぶかんぶかんながれてきたん。 ばばはこのももをみがて、うちへきやった。 ばばももをきろうとおもうと、ももはふたつにわれ ちゃって、なかからいきやんおとこのあかあちゃん がうまれちゃった。 じじとばばはそのあかやんももたろうというなめい をつけた。</p>
6: 誤 聴 部	<p>ズート ミャーニ アルトコデ ジージート パー バーン イテ ジージーフ ヤミャー マキョー トレー パー パーワ カワヤー アリャーモンニ パーバーン イキヤー モモン プカーンプカン キタ パーバーワ ソノモモヲ ヒロツテ ウチエー チャーッタ パーバーン キラズト モモン イキヤー アカン ンマレタ ジージート パーバーワ アギヤー モモタローッ テ ユー ナミャーヲ</p>

図1 「方言桃太郎」聴き取りのカード例

このデータベースを利用して、現在までに、方言における清濁と特殊拍の聴き取りについて⁽⁵⁾、および文末の聴き取りについて⁽⁶⁾ 分析を行っている。

清濁と特殊拍に着目したのは、日本語学習者にとって発音でも聞き取りでも難しいと言われている清音と濁音の区別や長音と短音の区別、また促音の言い落としや聞き落とし、および撥音の聞き違いなどが、方言の聴き取りにおいて

はどうかということを明らかにするためである。データは、清濁、促音、長音、撥音が含まれ、かつ文法的要素は含まれていない共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分を対象として分析を行った。

文末に着目したのは、文末には方言の特徴が現れやすい、文末には語りの特徴が現れやすい、収録部分の文末の動詞がすべて異なる語彙であるなどの理由による。データは、共通語における「ありました」、「行きました」、「流れてきました」、「帰りました」、「生まれました」、「つけました」に相当する部分を対象として分析を行った。

本稿における「～トイウN」の聴き取りについてもこのデータベースを利用して、「桃太郎という名前」の部分データをデータとして分析することにする。

3. 「～トイウN」について

3.1 日本語教育における「～トイウN」

名詞の修飾について日本語の教科書を概観すると、「中国の学生」「みどりのセーター」のような名詞による修飾は初級のごく早い時期に、「赤いセーター」「新しいテレビ」や「親切な人」「静かな公園」のようなイ形容詞やナ形容詞による修飾は初級の前半に、「キオスクで買ったおみやげ」「電車でわすれたおみやげ」のような動詞述語文による修飾は初級の後半に提示されるが、「松井という選手」「サッカーというスポーツ」のような「～トイウ」による修飾は難度が高いと考えられて中級で提示されるのが一般的であった。例えば、『中級日本語』（大阪外国語大学）では1巻の15課に、“Integrated Spoken Japanese”（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）では2巻の7課に、『日本語中級I練習帳』（東海大学）では12課に提示されている⁽⁷⁾。

しかし、「～トイウN」が中級の中期頃まで待たなければならないほど難度の高い項目であるのかという疑問が起り、引用の「～トイウ」は初級で提示されるのでその後であれば「～トイウN」を初級で出しても習得上の困難はないのではないかと考えられるようになった。また、わからないことを質問したり（例文（1））、未知のものに出会ったり（例文（2））、相手にわからないことを説明したり（例文（3））する機会の多い日本語学習者にとっては、次のような表現が早く使えるようになることが望ましいと考えられるようになってきた。

（1）事務の人：4月20日までに登録してください。

留学生：登録というのはいくつですか。

(2) 佐藤という人に会いました。

(3) ハワイのカイルアという所に住んでいます。

そこで、従来の初級教科書に続く中級教科書として作られた『日本語表現文型』（筑波大学日本語教育研究会 1983）ではこのような考えに基づいて第1課で「～トイウN」を提示している。その後、最近作られた教科書で例えば“SITU ATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE”（筑波ランゲージグループ 1992）では9課で「～ト言ウ」が提示され、10課で「～トイウノ」、11課で「～トイウN」が提示されている。この教科書は24課からなる初級教科書であるから、初級の前半の終わりあたりで「～トイウN」が提示されていることになる。

このように、「～トイウN」が今まで考えられていたより、難易度の点では低く、活用度の点では高いと認識されるようになり、最近では初級の段階で取り上げられる重要な項目になっている。

3.2 方言における「～トイウN」

『方言文法全国地図解説1』（国立国語研究所 1989）によると、「きのう、田中という人が来た」という文で全国807地点で調査をして得られた結果から、「トイウ」は大きく、トユーの類、テユーの類、テーの類、チュンの類、ユーの類に分けられているが⁽⁸⁾、実際のデータを見ると135の異なる形式が報告されている⁽⁹⁾。

3.3 CD「方言桃太郎」における「～トイウN」

上で述べたように、「～トイウN」という表現は日本語学習者にとって重要な学習項目であるが、方言では「トイウ」という形式が使用されるとは限らず多くの異なる形式が使われている。そこで、本稿では「～トイウN」の「トイウ」の部分に着目して分析することにする。

CD「方言桃太郎」に含まれている「～トイウN」は「桃太郎という名前」1か所である。16地点で方言で語られた「桃太郎という名前」をまとめると、表2のようになる。表は共通語の「トイウ」に対応する部分の形式に近いものでまとめられている。

表2は、「桃太郎」「という」「名前」の3つの部分に分けて示してある。どの地点でも、「トイウ」の前は「モモタロー」およびその音声変種、「トイウ」

表2 「桃太郎という名前」の地点別発話形式

地 点	発 話 形 式		
名 寄 市	モモタロー	トイウ	ナマエ
京 都 市	モモタロー	トイウ	ナ
大 阪 市	モモタロー	トイウ	ナ
名 古 屋 市	モモタロー	トユー	ナ
斑 鳩 町	モモタロー	トユー	ナ
静 岡 市	モモタロー	ツテユー	ナミヤー
山 口 市	モモタロー	チュー	ナ
福 岡 市	モモタロー	チュウ	ナ
鹿 児 島 市	モモタロー	チュ	ナ
気 仙 沼 市	モモタロ	ツチュ ⁽¹⁰⁾	ナ
浜 松 市	モモタロー	ツチュー	ナ
三 川 町	モモダロ	テ	ナメ
上 平 村	モモタロー	ユー	ナー
岡 山 市	モモタロー	ユー	ナー
五所川原市	モモタロウ	ズ	ナマエ
松 江 市	モモタロー	テッテ	ナメエー

の後は「ナマエ」およびその音声変種で、16のすべての地点で「～トイウN」という表現形式が使用されている。以下、「モモタロー」と「ナマエ」の形式については触れず、「トイウ」のみに着目していくことにする。

「トユー」の類が5地点、「テユー」の類が1地点で、これらの形式は「ト」にあたる部分と「イウ」にあたる部分がはっきりしている形式である。

「チュー」⁽¹¹⁾の類が5地点で、この形式は「ト」にあたる部分と「イウ」にあたる部分が融合した形式である。「ト」にあたる部分のみの「テ」が1地点、「イウ」にあたる部分のみの「ユー」が2地点で、そのほかに「ズ」が1地点、「テッテ」が1地点である。

4. 調査結果

4.1 「トイウ」の聴き取り

「トイウ」の地点別発話形式とその聴き取り調査の結果をまとめると、表3のようになる。表中の「正聴数 (%)」はその左に示した数の被調査者のうち

正しく聴き取った人数とかつこ内にその割合（以下「正聴率」という）を示す。「形式数」は被調査者が聴き取った形式の異なり数を示す。正聴数が1以上であれば、形式数のうち1つは正しい聴き取りの形式である。しかし、正聴数が0であれば、形式数の欄に示された数だけの異なった誤聴があったということである。

まず、表3の被調査者数と正聴数（％）から、共通語の「トイウ」に相当する部分の聴き取りについて見ていきたい。

全体的に見ると、被調査者延べ234人のうち正しく聴き取れたのは延べ106人（45.3％）である。これは、以前に分析した共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の正聴率12.2%⁽¹²⁾ や、6つの文末の正聴率38.5%⁽¹³⁾ に比べると高い。

発話形式別に見ると、「トユー」類の5地点が正聴率の上位1位から5位を占めている。この5地点だけの平均正聴率は91.7%で、6位以下と大きな差が見られる。逆に正聴率が低いのは、「チュー」類の5地点のうちの3地点と「テッ

表3 「トイウ」の地点別発話形式と調査結果

地 点	発話形式	被調査者数	正聴数(%)	形式数
斑 鳩 町	トユー	15	15(100%)	1
名 寄 市	トイウ	13	12(92.3%)	2
大 阪 市	トイウ	13	12(92.3%)	2
京 都 市	トイウ	16	14(87.5%)	3
名 古 屋 市	トユー	15	13(86.7%)	3
静 岡 市	ッテユー	15	2(13.3%)	3
山 口 市	チュー	16	10(62.5%)	3
福 岡 市	チュウ	14	5(35.7%)	6
鹿 児 島 市	チュ	16	0	5
気 仙 沼 市	ツチュ	14	0	6
浜 松 市	ツチュー	15	0	7
三 川 町	テ	14	1(7.1%)	7
岡 山 市	ユー	15	8(53.3%)	2
上 平 村	ユー	15	5(33.3%)	3
五所川原市	ズ	13	9(69.2%)	5
松 江 市	テッテ	15	0	4
合 計		234	106(45.3%)	62

テ」の1地点で、正聴率0%である。

次に、表3の形式数から、共通語の「トイウ」に相当する部分の聴き取りについて見ていきたい。

全体的に見ると、異なる形式数は全部で62である。これは、以前に分析した「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の異なる形式数合計112⁽¹⁴⁾や、6つの文末の異なる形式数合計100から123⁽¹⁵⁾に比べると少ない。

地点別に見ると、斑鳩町は全員が正しく聴き取ったので形式数は1、名寄市と大阪市は誤聴が1人であるから形式数は2である。京都市と名古屋市は誤聴が2人で形式数が3、五所川原市は誤聴が4人で形式数が5であるから、これらの地点では誤聴の人はそれぞれ異なった形式に聴き取ったということになる。逆に、岡山市は誤聴が7人で形式数が2であるから、7人とも同じ形式に聴き取ったということになる。

4.2 「トユー」類の聴き取りについて

方言の発話形式が「トユー」類に分類されるのは、斑鳩町、名寄市、大阪市、京都市、名古屋市の5地点である。録音を担当した方言調査者による文字化には「トイウ」と「トユー」があるが、これらを「トユー」類とした。

前にも述べた通り、「トユー」類は平均正聴率が91.7%で、他の発話形式に比べて圧倒的に高い。

誤聴は名寄市で1、大阪市で1、京都市で2、名古屋市で2で、延べ6であるが、そのうち「ト」と聴き取ったのが3例で、あとは「イウ」と「トイッテ」と「ニ」が1例ずつである。

4.3 「テユー」類の聴き取りについて

方言の発話形式が「テユー」類に分類されるのは、静岡市の「ッテユー」のみである。これを正しく聴き取れたのは15人中2人で、正聴率は13.3%である。誤聴の13例のうち12例は「トイウ」で、あとの1例は「テイウ」である。この方言発話では名詞のあとの促音が聴き取りの障害になっている可能性がある。

4.4 「チュー」類の聴き取りについて

方言の発話形式が「チュー」類に分類されるのは、山口市と福岡市の「チュー」、鹿児島市の「チュ」、気仙沼市の「ッチュ」、浜松市の「ッチュー」である。

同じ「チュー」でも、正聴率では山口市が62.5%（16人中10人）で福岡市が35.7%（14人中5人）と差が見られる。山口市の誤聴は、「ジュウ」と聴き取っ

たのが3例、「トイウ」が2例で、あと1例は無記入である。福岡市の誤聴は、「トイウ」が4例、「チュ」が2例で、あとは「ツチュー」と「ジュ」と「ジュート」が1例ずつである。

鹿児島市の「チュ」は16人全員が誤りで、そのうち12人が「チュー」と長く聴き取っている。あとの4人はそれぞれ異なった形式に聴き取っている。

気仙沼市の「ツチュ」は14人全員が誤りで、そのうち9人が「ト」と聴き取っている。あとの5人はそれぞれ異なった形式に聴き取っている。

浜松市の「ツチュー」は15人全員が誤りで、そのうち8人が「チュー」と促音を落とした形で聴き取っている。あとの7人はそれぞれ異なった形式に聴き取っている。

4.5 「テー」類の聴き取りについて

方言の発話形式が「テー」類に分類されるのは、三川町の「テ」のみである。これを正しく聴き取れたのは14人中1人で、誤聴の13例は、「ト」が4例、「キ」が3例で、あとの5例はそれぞれ異なった形式である。

4.6 「ユー」類の聴き取りについて

方言の発話形式が「ユー」類に分類されるのは、上平村と岡山市の「ユー」である。

同じ「ユー」でも、正聴率では岡山市が53.3% (15人中8人) で上平村が33.3% (15人中5人) と差が見られる。誤聴の形式を見ると、岡山市の7人全員と上平村の9人が「トイウ」と「ト」のある形に聴き取っている。上平村の1人は「イウダ」と聴き取っている。

4.7 その他の聴き取りについて

五所川原市では「トイウ」にあたる部分が「ズ」と語られている。これは正聴率が69.2% (13人中9人) で、「トユー」類の5地点に次いで高い。しかし、誤聴の4例は、「トイウ」、「ヲズ」、「トイウズ」、「ジニ」と全くばらばらである。

松江市では「トイウ」にあたる部分が「テッテ」と語られている。これは15人全員が誤った聴き取りをしている。誤聴の形式は「トイッテ」が11例、「ツテイッテ」が2例で、「ツテッテ」と「ツテ」が1例ずつである。

5. 考 察

「トイウ」に相当する部分の聴き取りは、正聴率が45.3%で、異なる聴き取り形式数が62である。これを、「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の正聴率12.2%、異なり形式数112や、6つの文末の正聴率38.5%、異なり形式数100~123に比べると、「トイウ」に相当する部分は正聴率が高く、異なり形式数が少ない、すなわち、「トイウ」に相当する部分は、比較的良好に聴き取ることができ、また誤りの形式のばらつきが少ないということになる。

「トイウ」に相当する部分の各地点における発話の長さは1拍から4拍で、平均2.4拍である。これは「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の各地点における発話の長さの平均11拍⁽¹⁶⁾や、6つの文末の各地点における発話の長さの平均6.1拍⁽¹⁷⁾に比べると、半分以上の短さである。また、「トイウ」に相当する部分の各地点における発話には濁音や促音や拗音が少ない。このようなことが、正聴率の高さと異なり形式数の少なさにつながっているであろう。

表3に示された「トイウ」に相当する部分の聴き取りの正聴率を見ると、上位5地点は100%~86.7%で、6位の69.2%との間に大きな差が見られる。上位5地点の発話形式は「トイウ」か「トユー」で、これは共通語と同じ形式である。文末の聴き取りにおいても正聴率が90%以上の発話形式は10のうち9が共通語と同じ形式のものであった⁽¹⁸⁾。これらのことから、共通語と形式が同じであれば音調や音価が多少異なっても、上級レベルの日本語学習者は方言における発話をかなり聴き取ることができると考えられる。

一方、正しく聴き取れたのが0または1または2というような正聴率の低い発話形式もある。正聴率が0%の発話形式は、「チュ」(鹿児島市)、「ツチュ」(気仙沼市)、「ツチュー」(浜松市)、「テッテ」(松江市)である。誤聴の形式を見ると、鹿児島市の「チュ」は16人中12人が「チュー」と、浜松市の「ツチュー」は15人中8人が「チュー」と聴き取っている。ここには、短い音を長く聞いたり、促音を聞き落とししたりする傾向が見られる。また、気仙沼市の「ツチュ」は14人中9人が「ト」と、松江市の「テッテ」は15人中11人が「トイッテ」と聴き取っている。インプットされた方言の発話形式「ツチュ」や「テッテ」は共通語を学習する中では耳にすることのない形式であり、一方聴き取った形式の「ト」や「トイッテ」は共通語にある形式である。予期しないような発話形式に出会い、それがうまく聴き取れないと、共通語で使われているよう

な形に聴き取ってしまうのは、聴き取りの際の一つのストラテジーなのかもしれない。

正しく聴き取れたのが1人というのは三川町の「テ」で、これは14人中4人が「ト」、3人が「キ」と聴き取り、あとは「トイウ」「ツテ」「トケ」「ムウト」無記入がそれぞれ1人ずつである。ここにも「トイウ」や「ト」のように共通語にある形式による聴き取りが見られる。

また、正しく聴き取れたのが2人というのは静岡市の「ツテュー」で、これは15人中12人が「トイウ」と聴き取り、あと1人は「テュー」と聴き取っている。この聴き取りでは促音が障害になっている可能性があるが、しかし促音が落ちただけの「テュー」という形式は1例しかなく、あとの誤聴は全部共通語にある「トイウ」という形式なのである。

このような傾向はインプットされた方言の発話形式が「ユー」の岡山市と上平村でも見られる。岡山市では誤聴の7人全員が、上平村では誤聴10人のうち9人が「トイウ」と聴き取っているのである。

ここで、「トュー」類の5地点を除いた11地点の誤聴に見られる共通語の形式をまとめてみると、表4のようになる。

「トュー」類の5地点を除いた11地点で見られる誤聴は全部で122例であるが、そのうち30.3%の37例が「トイウ」、10.7%の13例が「ト」、9.0%の11例

表4 誤聴に見られる共通語の形式

地 点	発話形式	被調査者数	誤聴数	トイウ	ト	トイッテ
静 岡 市	ツテュー	15	13	12		
山 口 市	チュー	16	6	2		
福 岡 市	チュウ	14	9	4		
鹿 児 島 市	チュ	16	16			
気 仙 沼 市	ツチュ	14	14	1	9	
浜 松 市	ツチュー	15	15			
三 川 町	テ	14	13	1	4	
岡 山 市	ユー	15	7	7		
上 平 村	ユー	15	10	9		
五所川原市	ズ	13	4	1		
松 江 市	テッテ	15	15			11
合 計		162	122	37	13	11
				61		

が「トイッテ」である。合計すると61例で、全誤聴数のちょうど半分が共通語の形式によって聴き取られていることになる。特に、「トイウ」による聴き取りは8地点で見られる。このことは、方言の聴き取りがうまくいかない場合にはインプットである方言発話の形式に関係なく共通語の形式によって聴き取るというのが聴き取りの一つの方策であるということを示唆しているといえよう。このような現象は文末の聴き取りでも見られるが⁽¹⁹⁾、例はわずかである。「トイウ」に相当する部分は拍数が少ないためちょっと聞き損なうと修復が難しい。また、「～トイウN」における「トイウ」は意味を伝える役割は担っていないが、構造上は大切な役割を担っている。学習者はそのことを知っているため、聞き取れなければ共通語の形式によってそれを補おうとするのではないかと考えられる。

そのほかに見られる誤聴の形式として、「ジュ」「ジュウ」「ジュウト」などがある。これらは「チュー」類の5地点すべてで見られ、かつ他の地点では全く見られない。したがって、これらの誤聴は有声と無声の混同によって生じたものであろう。

6. おわりに

日本語教育における方言の問題が表面化してきたにもかかわらず、日本語教育や日本語学習の視点からの方言研究が不足しているという現状があること、同一の調査項目で採録された日本全国の方言の高品質の音声データベースが作成されたこと、などをきっかけとして、日本語学習者を対象に方言音声の聴き取り調査を行った。利用した音声データベースは、昔話『桃太郎』の方言語りのCDである。この調査結果を利用して、現在までに共通語の「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の聴き取り、および文末の聴き取りについて分析を行い、本稿では「桃太郎という名前」の「トイウ」の部分に着目して分析を行った。本稿で明らかになったことを、前の2つの分析で明らかになったことに言及しながらまとめると次のようになる。

- 1) 正聴率という点から見ると、「トイウ」、6つの文末(「流れてきました」「つけました」「ありました」「生まれました」「帰りました」「行きました」⁽²⁰⁾)、「ドンブラコ・ドンブラコト」の順に低くなる。すなわち、「トイウ」に相当する部分の聴き取りは、「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分や6つの文末の聴き取りに比べると、正聴率が高い。

- 2) 聴き取った形式の異なり数という点から見ると、「ドンブラコ・ドンブラコト」と6つの文末はほぼ同じで、「トイウ」はその約6割と少ない。すなわち、「トイウ」に相当する部分の聴き取りは、「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分や6つの文末の聴き取りに比べると、聴き取った形式のばらつきが少ない。
- 3) 方言の発話形式が共通語の形式と同じ「トユー」類は平均正聴率が91.7%と高い。同様の傾向は6つの文末の聴き取りでも見られた。方言の発話形式が共通語の形式と同じまたは類似の場合は、音調や音価が多少異なってもかなりよく聴き取ることができる。
- 4) 「トイウ」に相当する部分の方言発話の聴き取りがうまくいかない場合には、方言の発話形式に関係なく共通語の形式によって聴き取ろうとする傾向が見られる。これは「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の聴き取りや文末の聴き取りに比べて、「トイウ」に相当する部分の聴き取りに顕著に見られる傾向である。

「～トイウN」という形は、日本語学習の初級後半あるいは中級前半でかなりしっかり学習した項目である。したがって、方言発話であるために「トイウ」の部分の聞き取れなくて「～」と「N」しか聞き取れなくても、それを構造としてとらえ、学習した知識を活用して「～」と「N」の間に「トイウ」を補いながら聞き取っているようである。

方言の聞き取りにおいて「～トイウN」以外でも構造上の役割を担う言語表現についてはこのような方策が使えるのであろうか。今後、日本語学習者の方言聴き取りについて調査や分析をする場合は、意味伝達を担う言語表現と構造上の役割を担う言語表現をわけて行う必要があるだろう。

注

- (1) 田尻 (1992) p. 11
- (2) 音声データベースの作成は同重点領域研究のB-1班「音声データベースの作成・保存と利用に関する研究」(代表 板橋秀一)によって行われた。
- (3) 書き取りという方法で聴き取り能力を判定する場合、聴き取りはできても、書き取るときに表記を間違えたり、仮名では表せない発声であるためにどう表記すればよいかわからないというような問題があるため、判定材料としてかなり限界がある。
- (4) CD付属のフロッピーディスクデータベースによる。

- (5) 堀口 (1993b)
- (6) 堀口 (1993a)
- (7) 砂川 (1990) による。
- (8) 国立国語研究所 (1989) p. 173
- (9) 国立国語研究所 (1989) pp. 313-318
- (10) 「モモタロ^ッチュ」の促音は、「モモタロ^ー」の長音が促音化したとも考えられなくはないが、「ツッ」や「ツチュ」のように名詞の後が促音化している例が他の地点にもあることや、国立国語研究所 (1989) でも名詞のあとに促音が認められる場合は促音を「トイウ」の部分に含めて扱っていることなどに従って、「ツチュ」を「トイウ」として扱った。
- (11) 国立国語研究所 (1989) には「チュン」の類という分類があるが、これは琉球特有の形式を集めたものである。本稿では「チュー」またはそれに近い形式をまとめて「チュー」の類とする。
- (12) 堀口 (1993b) p. 77
- (13) 堀口 (1993a) p. 26
- (14) 堀口 (1993b) p. 77
- (15) 堀口 (1993a) pp. 21-25から6つの文末の異なる発話形式合計を出すと、「ありました」が106, 「行きました」が118, 「流れてきました」が100, 「帰りました」が122, 「生まれました」が113, 「つけました」が123である。
- (16) 「ドンブラコ・ドンブラコト」に相当する部分の各地点における発話は6拍から13拍で、平均11拍である。
- (17) 6つの文末のうち、「ありました」に相当する部分の各地点における発話は2拍から8拍で平均5.6拍, 「行きました」に相当する部分の各地点における発話は3拍から9拍で平均5.7拍, 「流れてきました」に相当する部分の各地点における発話は6拍から11拍で平均7.9拍, 「帰りました」に相当する部分の各地点における発話は4拍から8拍で平均5.8拍, 「生まれました」に相当する部分の各地点における発話は4拍から11拍で平均6.4拍, 「つけました」に相当する部分の各地点における発話は3拍から8拍で平均5.2拍である。
- (18) 堀口 (1993a) p. 26
- (19) 「生まれてきんしゃったげな」(福岡市)を「生まれてきちゃったような」と聴き取った例, 「流れつきもした」(鹿児島)を「流れてきました」と聴き取った例, 「行っちゃったといな」(山口)を「行っちゃったというの」と聴き取った例, 「つけさしたげな」(名古屋)を「つけさしてあげな」や「つけさせてあげな」と聴き取った例, 「つけたげな」(松江)を「つけてあげな」と聴き取った例などが、わずかな例である。
- (20) 正聴率の高いものから順に並んでいる。

参考文献

- 板橋秀一(1993) 『日本語方言音声データベースの構築と利用』 文部省重点領域研究『日本語音声』研究成果刊行書
 郡 史郎(1991) 「全国21地点の話者による共通語版「桃太郎」の韻律的特徴」

- 『方言音調の諸相—西日本—(2)』 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」総括班刊行書
国際交流基金(1986) 『教師用日本語教育ハンドブック発音』
国立国語研究所(1989) 『方言文法全国地図解説1』
真田真治(1992) 「方言の情況と日本語教育」『日本語教育』76
渋谷勝巳(1992) 「社会言語学的に見た日本語学習者の方言能力」『日本語教育』76
杉藤美代子(1989) 「現代の日本語音声研究の課題」『日本語学』8巻3号
砂川有里子他編(1990) 『中・上級日本語教科書文型索引』くろしお出版
田尻英三(1992) 「日本語教師と方言」『日本語教育』76
ダニエル・ロング(1992) 「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76
筑波大学日本語教育研究会(1983) 『日本語表現文型中級I』 凡人社
筑波ランゲージグループ(1992) “SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE
VOLUME TWO: NOTES” 凡人社
細川英雄(1992) 「日本語教育と方言意識」『日本語教育』76
堀口純子(1993a) 「日本語学習者による方言桃太郎の文末の聴き取り」 文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」研究成果刊行書『日本語音声と教育』
堀口純子(1993b) 「日本語学習者による方言音声の清濁と特殊拍の聴き取り」『文藝言語研究 言語編』23巻
堀口純子(1993c) 『日本語教育におけるコミュニケーション能力養成のためのデータベース作成と利用の研究』平成4年度科学研究費補助金一般研究(C)研究成果報告書